意外性に関わる言語形式と心理学における感情研究

髙木幸子・坂本暁彦

1. 研究の目的：言語学と心理学によるナント型感嘆文への学際的アプローチ

情報源を言語的に標示する証拠性マーカー（evidential marker）の存在が以前から知られているが、それにまつわる研究を背景にして意外性（mirativity）という意味カテゴリーの存在が指摘され、注目を浴びている（cf. Delancey (1997)）。意外性とは話し手にとっての新情報・予想外・驚きといった意味を表すカテゴリーであるとされるものの（Delancey (1997, 2001)）、その定義は確定的なものとは言えず、未だ検討の余地が残されている（cf. 五十嵐 (2015)）。そこで本稿では、心理学的知見から、意外性に関わると想定される言語形式である日本語のナント型感嘆文へとアプローチし、意外性を定義するに際しての新たな視点を提供することを目的とする。

2. 仮説の提示：話し手の心理プロセスを順番に言語化した形式としてのナント型感嘆文

本稿では、(1)に示す日本語のナント型感嘆文（「なん{と/て}」が文頭に生起する感嘆文）を分析対象とする。

(1) a. 名詞タイプ：なんてきれいな花(なん)だ！

b. 述語タイプ：なんてきれい*(なん)だ！

ナント型感嘆文には 2 種類タイプがあり、「花」のような名詞要素が生起するタイプ(1a)と、名詞要素が生起せず述語に「の」が後続するタイプ(1b)とがあるとされている。すでに安達 (2002)が指摘しているように、当該形式に生起する「の」に関して、名詞タイプではその生起が随意的となり、述語タイプでは義務的になる。

文末に生起する「の」（以下、文末詞「の」）の分析は大きく 2 つに分かれる。一方は、「の」を名詞化辞（nominalizer）とする見方で、直前の節を名詞化する機能を持つという形で特徴付けられ、統語論研究において支配的な見方となっている（e.g., Kuno (1980)）。他方は、「の」をある種のモダリティ要素として見なす意味・語用論的な分析である。後者において説得力のある分析に五十嵐 (2015)がある。五十嵐は、「の」を意外性マーカー（mirative marker）とし、当該内容が新しく（新情報）、予想外であり、しばしば驚きの解釈を持つという分析を示すことで、文末詞「の」の新たな分析の可能性を示した。本稿では、後者の見方を支持し、心理学領域において蓄積されてきた感情研究（e.g., Russell and Bullock (1985), 山根 (2005)）の知見を踏まえ、図 1 に示す心理プロセスと言語化の対応関係に関する仮説を提示する。

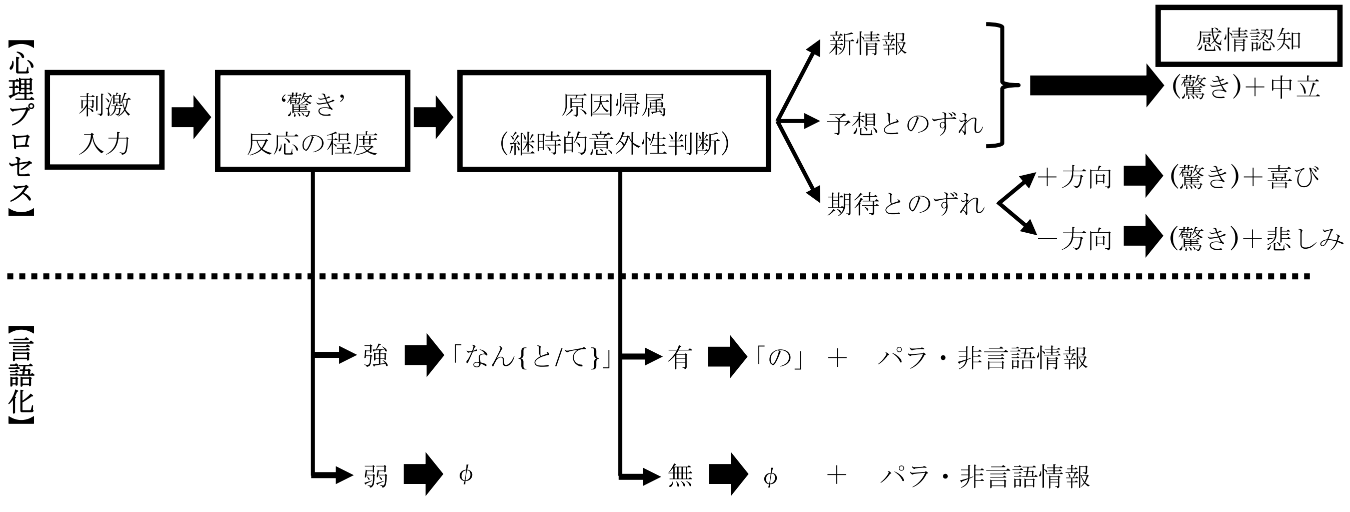

図 1. 心理プロセスと言語化の対応関係

この仮説のもと、「なん{と/て}」は即時的反応のマーカーとして特徴付けられ、何らかの事態に遭遇したときの'驚き'反応の程度が強いことを示す（程度性については笹井 (2006)を参照）。一方、「の」は継時的意外性判断のマーカーと定義可能で、知識上想定されていた事態との対比において（cf. 五十嵐 (2015)）、当該事態が予想・期待値を上回っているという判断を下したことを示す。これにより、先行研究における文末詞「の」の随意性（cf. (1a)）や義務性（cf. (1b)）に関する観察を、この特徴付けから説明することが可能となる。

ここでは紙幅の関係から、名詞タイプのナント型感嘆文に関する事実をひとつだけ取り上げることにする。

(2) a. なんて{味/論文}だ！（不快の評価が優先的に得られる; cf. 日本語記述文法研究会(編) (2003)）

b. なんて{味/論文}なんだ！（快・不快いずれの評価も得られうる）

a 文では不快の評価が優先的に得られる。その一方で、文末詞「の」を伴う b 文では、快・不快いずれの評価

も得ることができる。b 文でこの 2 通りの意味解釈の可能性があることは、「の」が継時的意外性判断のマーカーだとすれば容易に説明がつく。つまり、b 文では、予想や期待に反して{うまかった/おもしろかった}あるいは{まずかった/つまらなかった}という快・不快の解釈が得られるという形で説明される。

3. 心理学実験：仮説の量的検証

本節では、文末詞「の」を継時的意外性判断のマーカーとする図 1 の一部を構成する仮説を心理学実験から量的に検証することで、(2)における言語データの質的な説明が妥当であることを示す。実験の目的は、（X）発話者による発話時の快度評価は「の」が生起した場合と比較して、生起しない場合には不快と判断されやすい、（Y）快度評価における変動係数は、「の」が生起しない場合と比較して、生起した場合の方が大きい、の 2 点を量的に検証することであった。

ここでは、実験参加者、実験刺激および実験手続きなどの詳細について述べる。実験参加者は 21 名（男性 6 名；女性 15 名）であり、平均年齢は 21.42 歳（$SD = 0.51$）であった。実験刺激として、MacBook（Apple 社製）に標準装備された音声読み上げツールによる、抑揚や音圧の変化が含まれない人工音声を編集加工したものを用いた。発話内容は、①なんて人だ、②なんて人なんだ、③なんて部屋だ、④なんて部屋なんだ、⑤なんて眼鏡だ、⑥なんて眼鏡なんだ、⑦なんて犬だ、⑧なんて犬なんだ、⑨なんて猫だ、⑩なんて猫なんだ、⑪なんて試合だ、⑫なんて試合なんだ、の全 12 種類であった。つまり、文末詞「の」が生起するかどうかで異なるが、言及する対象が同一の発話 6 種であった。実験は集団形式で、2 回に分けて実施された。実験では参加者に対して上述の音声刺激をランダムに呈示し、発話者の対象に対する不快もしくは快の印象の程度を 7 段階（1. 非常に不快－7. 非常に快）で評価することを求めた。このとき、具体的には、「これから皆様には、この A はなんて A だ、といったように、A に対してなんらかの評価を下しているような 12 タイプの発話を聞いていただきます。その発話をよく聞き、発話者は発話時に評価対象である A をどのように評価したと思うかについて、非常に不快から非常に快までの 7 段階でお答えください。」という実験教示を与えた。

仮説（X）について検証するため、独立変数を「の」の生起の有無とする、対応のある t 検定を実施した。従属変数として、発話時の評価値から「の」が生起しない場合の平均値と、「の」が生起する場合の平均値を実験参加者ごとに算出して用いた。t 検定の結果、「の」の生起の有無に基づいた有意差がみられ、「の」がある場合よりもない場合における評価値が低いことが示された（$t(20) = 3.57, p < .001$）。この結果を図 2 に示す。これは、発話時を想定した場合、「の」が生起した場合と比較して、生起しない場合の方が対象に対する評価がより不快に判断される傾向があることを示していた。ゆえに、仮説（X）は量的に検証された。

次に仮説（Y）について検証するため、上記と同様に独立変数を「の」の生起の有無とする、対応のある t 検定を実施した。従属変数としては、平均値と標準偏差に基づいて実験参加者ごとに算出された変動係数を用いた。t 検定の結果、「の」の生起の有無に基づいた有意差がみられ、「の」がない場合よりもある場合における変動係数が大きいことが示された（$t(20) = -3.05, p < .005$）。この結果を図 3 に示す。このことは、発話時を想定した場合、「の」が生起しない場合と比較して、生起した場合の方が評価における平均値に対するばらつきが大きい傾向があることを示していた。ゆえに、仮説（Y）は量的に検証された。

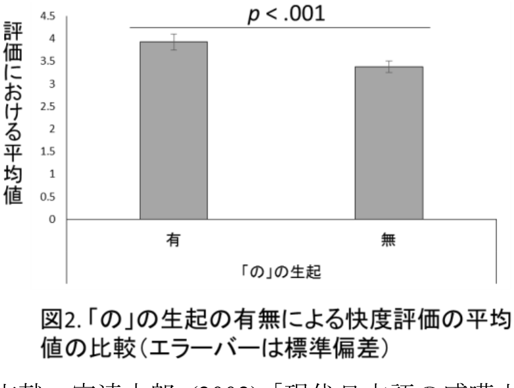

図2.「の」の生起の有無による快度評価の平均値の比較（エラーバーは標準偏差）

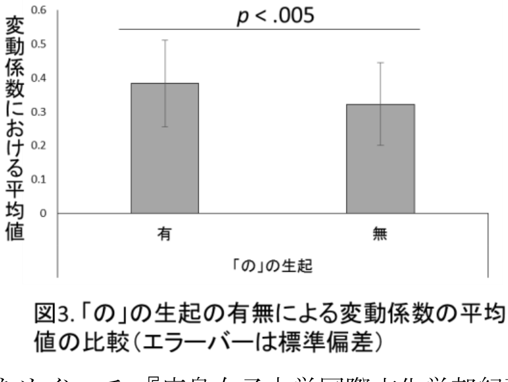

図3.「の」の生起の有無による変動係数の平均値の比較（エラーバーは標準偏差）

主要参考文献　安達太郎 (2002)「現代日本語の感嘆文をめぐって」『広島女子大学国際文化学部紀要』10, 107-121.／五十嵐啓太 (2015)「Mirativity を表すマーカーとしての「の」」和田尚明・渡邊淳也（編）『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』181-213, TAME 研究会.／Russell, James A. and Merry Bullock (1985) “Multidimensional Scaling of Emotional Facial Expressions: Similarity from Preschoolers to Adults,” *Journal of Personality and Social Psychology* 48(5), 1290-1298.／笹井香 (2006)「現代語の感動文の構造―「なんと」型感動文の構造をめぐって―」『日本語の研究』2(1), 16-31.